

# 神戸大学大学院建築学専攻 / 建築学科計画系インターンシップ講演会 神戸建築学

18

神戸建築学は、著名な建築家や研究者等を講師としてお招きしてご講演頂く講演会である。講演後には講師と神戸大学の院生・学部生との自由な討議の機会を設け、新たな環境創造における建築学の可能性を探る機会として開催している。2021年度では第46回目となる講演会を、建築家で京都大学教授の平田晃久先生をお呼びして、また、第47回目となる講演会を建築家で東京大学名誉教授の内藤廣先生をお呼びして行った。2回ともコロナ禍での開催となったためオンライン形式となった。

神戸建築学 第46回

## 「Human/Nature」

平田 晃久 建築家・京都大学教授

1971年大阪府に生まれる。1997年京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。現在、京都大学教授。主な作品に「桟屋本店」(2006)、「sarugaku」(2008)、「Bloomberg Pavilion」(2011)、「太田市美術館・図書館」「Tree-ness House」(2017)、「Overlap House」(2018)、「9hプロジェクト」(2018-2020)等。第19回JIA新人賞(2008)、第13回ペネチアビエンナーレ国際建築展金獅子賞(2012、共働受賞)、村野藤吾賞(2018)、BCS賞(2018)等多数受賞。著書に『Discovering New』(TOTO出版)、『JA108 Akihisa HIRATA 平田晃久2017→2003』(新建築社)等。そのほか、東京、ロンドン、ベルギーなどで個展、MoMAにて「Japanese Constellation」展(2016)を合同で開催。ミラノサローネ、アートバーゼル等にも多数出展している。



©Luca Gabino

[日時]

2021年6月18日(金) 17:00～19:00

[司会・進行]

栗山尚子(准教授)

[担当学生] ◎:代表

◎旭智哉 加藤亜海 蒲田峻大 高坂啓太 柴田貴美子 幸田梓 篠山航大  
福原草雅 前田穂太 吉永悠真(M1)  
松井暁 岩橋美結 周賢人(B4) 櫻本愛里(B2)

[参加者数(概算)]

108名

### 1.はじめに

今回平田先生には、様々なプロジェクトと共に設計の思想やプロセスを説明していただいたが、本稿ではその中から特に多く言及されていた4つのプロジェクトについて抜粋させていただきたいと思う。

### 2.講義概要

#### 人間と自然の間で

人間は自分たちの作る建築を特別なものだと思っているし、人工物をどこか特別視してきた。しかし、俯瞰的に人工物としての建築を捉え直した時に、自然界にあるものと大差ないのではないか。建築を自然なものとして捉え、自然界に存在する絡まりの原理を建築に適応させる。「からまりしろ」という言葉を用いて、自然界にあるような多層的な建築を考えたい。

#### 目指す建築

自然環境が多く残る場所で育ち、自然環境に近い状況を建物の中

で作れないかと思った事が建築を志すきっかけとなった。

蝶が花の間を飛んでいる時、花と花の間、木の枝と枝の間には見えないが確かに多様な三次元的な間の領域が発生していて、その豊かな領域の中を蝶は飛んでいる。人間もそのような三次元的な自分の生活領域を感じられるような建築をつくりたいと思う。

人間は人工物を特別視しているけれど、自然の地形と、屋根は両方とも水の流れが顕在化した形であり、ある意味で同じである。人間の活動を突き放してみてみると、人間は賢くて自分の意思で建築や都市をつくっているように思うかもしれないが、バクテリアとかカビとかとやっていることは変わらず、人間と自然は大して変わらないのではないか。

自然界では、例えば「魚の卵」は「海藻(昆布)」に絡まり、その「海藻」は凸凹とした「岩」に絡まってという階層構造ができている。長く存在しているものが、より短く存在しているもののインフラになっていて、お互いに別々の出自を持ちながらも絡まり合っている。こういった偶然出会ったものが重層していて全体としては豊かな世界ができるといいうのが自然界に見られる絡まりの原理だと思う。

これらを建築で表現するために考えた言葉が「からまりしろ」である。なにかが絡まる余地、しろ。何かが絡まる余白を持つ場所を作るのが建築なのではないか。互いに混ざり合う、絡まり合うものとして建築とそれをとり囲む環境を考えていくことはできないだろうか。

#### 桟屋本店 (Showroom H)

一番最初につくった建築。「からまりしろ」という言葉はまだ考えていなかったが同じような問題意識は持ち始めていた。新潟県の上越市にある農作業器具のショールーム。伊東事務所時代の経験から、人間の動物的な習性を考えながら商業空間を考えるという面で、世界的に有名なお店のオーナーたちに共通する意識があると感じていた。そのように動物としての人間を引き出すような建築を作れないか、人間にとてのサンゴ礁のようなものを作れないかという思いがあった。

ローコストな建築で、5メートルグリッドで壁を並べ、斜めにカットオフするだけという単純な方法でできている。また、斜めの壁を平面的に45度傾けている。斜めに開口が空いていることで、上方では隣と完全に区切っているが、下方では隣と混ざりあう、滲んだ雲の中のような体験となる。直線的な造形物に見えるが、歩くと手前の壁は早く動き、奥の壁はゆっくりしか動かないで、カメラの絞りが変化するよう、曲線的な「ひだ」のように感じられる空間ができる。

#### Tree-ness house

「魚の卵一昆布一岩」を初めてセットで作ったプロジェクト。「岩」=

コンクリートの箱、「昆布」=ひだのような窓、「魚の卵」=その周りに絡む植物、というように違うもの同士が絡み合ってできている建築を提案した。機能的には合理的なプランであるが、「ひだ」のような開口を開けることでヒューマンスケールな場所が生まれたり、中と外がつながったりし、その周りに植物を置くことで全体として一本の木のような呼吸する建物の様相が現れる。

下の方はコンクリートの箱でできた岩山のような状態で、上のほうに行くとブレイクダウンされていき、「ひだ」の開口や植物が現れる。三次元的な「ひだ」の庭によって間口の狭い切り立った環境の中でも三次元的に人が建築にへばりつくように活動することが可能になっていている。

### 太田市美術館・図書館（Art Museum & Library, Ota）

群馬県太田市はスバルの企業城下町であるが、太田駅の駅前はほとんど人が歩いておらず閑散としていた。その太田駅の目の前の敷地に美術館・図書館をつくるプロジェクトである。関東平野の荒漠とした平野にいくつか丘のような地形がたくさんある場所で、そこに人工と自然が入り混じる丘のような場所を提案した。周りの建物と同じようなスケールの美術館・図書館の箱と、それぞれの動線であるらせんのスロープが立体的に絡み合い全体として一つの丘になっている。

この建物を作るにあたっての特殊な試みとして、建物の重要な決定を公の場に投げ出すワークショップ（ディスカッション）をした。ワークショップを通して、複数案を出したものから一つ選ぶということを繰り返した。太田の市民や行政の人、様々な分野の専門家などが全員集まって一つの場で決定していくことが行われた。このように設計のプロセスをオープンにした結果、スタティックなアイデアがだんだんワイルドに、人々のいろいろな思いによって侵食されていくような経験をした。絡まりのプロセスが時間軸を持ち、設計のプロセスとなった。

建築の中で閉じていない豊かさ、絡まりあいがあると自身が感じる建築となった。建物が持っている公共性をどう考えていくべきかを議論し、初めて空間として立ち上げた。事務所の中では気づけない様々な人による思考によって新たな気づきが生まれたものもある。

### 9hours Projects

街の中にカプセルがそのまま投げ出されたようなものを作りたいというコンセプトを持つ9hoursの一連のカプセルホテルのプロジェクト。赤坂や竹橋、浅草、新大阪、水道橋のプロジェクトをピックアップする。

この一連のプロジェクトでは、各敷地周辺の特性を読み取り設計に反映させた。それによりホテルを使用する人が、まるで浮世絵の東海道五十三次を見るように、その場所の特性を再認識できるような働きを建物がすることになるのではないかと思う。ニュートラルなカプセルとそれぞれの場所が出会うことによって場所を鏡のように映し出す建物になるのではないか。またそれらの各所に散らばった建物がネットワークをなすことで9hoursというフィルターを通して各場所の違いが浮かび上がってくる。

建築は点にしか過ぎないかもしれないが、その点と点を結ぶネット

ワークが介在することができれば、もう少し都市とダイレクトに関わり合うことができるかもしれないと考える。

### 「/」に込めた思い

「Human / Nature」という題の「Human」と「Nature」の間ににある「/」は、人間と自然の鋭い対立とその一方で同じものであるという緊張関係を表している。明らかに自然の秩序とは違うものを作ろうとしている人間の意識的な働き、また言語によって思考する明晰な知性といった自然とは全く違う働きがあるから建築が生まれるという前提とともに、人間も自然の一部であると考える。

### 3.担当学生考察

我々は、事前学習で平田先生の思想や建築作品を分析するにあたり、「動物としての人間」や「魚の卵—昆布—岩」という「からまりしろ」の原理などの思想に注目した。平田先生の「からまりしろ」や「ひだ」という言葉は、その言葉が包含する意味はもっと複雑ではあるが、どこか分かった気がする言葉でもあると感じていた。それは「動物としての人間」という言葉からも読み取れるように、生物としての人間の成り立ち、ベーシックに共有されている動物的感覚といった、言葉になる以前のレベルの話で、言語や文化が違っても共有できるものであるからだとわかった。

「からまりしろ」という概念は10年間で形を変えながら、最近では建築という形がなくても議論がドライブされるまでになってきているという。固定された形で記述できない多様な現代において、どの部分をどう捉えるかという考えが必要になり、その際、「からまりしろ」という完全な閉域を持たない概念は有効になってくるのではないか。また、講演会中に何度も登場した「魚の卵—昆布—岩」のダイアグラムは、自然界が持つ「野性的な階層構造」の概念を表したものもあると思うが、そのように他者性を孕んだ階層構造に着目することは、メタボリズムが単一原理で解かれようとしたことに対して混在系であるということで超克の可能性を持つのではないかと感じた。また都市と建築の関係を考えるにあたって平田先生が「Tree-ness house」で行われているような「野性的な階層構造」を部分的にでも建築化するという試みは今後わたしたちも考えていくべきことであると感じる。

（文責：幸田梓、前田稟太）



平田先生と神戸大学の担当学生、教職員での集合写真

（最上段右から2番目が平田先生）

神戸建築学 第47回

## 「神戸大生との対話」

**内藤 廣** 建築家・東京大学名誉教授

1950年生まれ。1976年早稲田大学大学院修士課程修了後、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所（スペイン・マドリッド）、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。2001～11年東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻にて教授、同大学にて副学長を歴任。2011年一回大学名

誉教授。2007～09年度には、グッドデザイン賞審査委員長を務める。代表作に、海の博物館、牧野富太郎記念館、島根県芸術文化センター、虎屋京都店、静岡県草薙総合運動場体育館、富山県美術館、とらや赤坂店、高田松原津波復興祈念公園 国立追悼・祈念施設、東京メトロ銀座線渋谷駅、京都鳩居堂などがある。近著には『検証 平成建築史』（共著・日経BP社）、『クロノデザイン』（共著・彰国社）、『内藤廣設計図集』（オーム社）、『空間のちから』（王国社）、『建築の難問 ～新しい凡庸さのために』（みすず書房）など。

〔日時〕

2021年11月18日(木) 19:00～20:30

〔司会・進行〕

光嶋裕介（特命准教授）

〔担当学生〕 ◎：代表

◎篠山航大 旭智哉 柴田貴美子 長田遙弥 蒲田峻大 幸田梓 加藤亜海  
福原草雅 前田穂太 高坂啓太(M1)

〔参加者数(概算)〕

145名



接感じられる空間になっている。

このピロティに虹が出るという不思議なことが起った。ガラスの一端がたまたまプリズムとなって光の具合で床に虹が出る。こうした自分の考えとは別のものが建築に現れることがある。目指して作るものではないと思うが、一生懸命に建築に向かっていると、たまにご褒美としてこうした驚くような体験をすることがある。

機能や経済の枠組みを外したときに建築を作り出す原動力となるものは、夢や希望といった心の中の熱いものだと思った。僕らが原初的に持っているそれらを心の中に抱きながら設計をした。

### 対話1 「人間と自然」

**学生(長田)**「僕たちは原風景として自然豊かなところで育ったのではなく、すでに発展した都市の中で成長してきた。心の中で自然に対して距離を感じるが、人間と自然との間の亀裂はどういうものなのかな。人間と自然と対比的に考えることについて、内藤先生はどう考えているか、お聞きしても良いか。」

**内藤先生**「地球自体が弱ってきて、変質し始めていることをどう考えるかだ。そうなった原因は僕ら自身にあるのかもしれないと思うと非常に複雑な気持ちになる。一方で自然是、阪神大震災や3.11を引き起こした手強い相手でもある。三陸の復興は、自然に対してどう考えるかを問われている気がしている。自然とどのように向き合えばよいのか。近代的な技術、社会制度、官僚システムは、海を対立的に捉える。それは漁師が海に対して抱いているような感情とは真逆のメンタリティだ。そこには人と自然の根源的な問いがある。近代社会は生と死をうまく扱えない。たとえば、われわれは勝手に死んではいけないことになっている。漁師はリスクを容認して暮らしているが、行政はリスクを容認することができない。このスタンスが自然に対する考え方の違いにつながる。問題を突き詰めると、人が生きることと死ぬことにつながると思う。自分を自然の一部として捉えられるか。地球で起こっている問題を自分が関与している問題でもあると思えるかは、自分が自然の一部と認識できるかどうかにかかっている。建築に対してどう向き合うかも同じで、自分が建築によって生み出す環境も、自分自身なのかもしれないし、同時にその環境は自然 자체なのかもしれない。それらを不連続なものとして考えずに、ひとまとまりで思考することが求められるのではないか。答えは一つではない。提案だが、ここに時間のファクターを入れ込むと、今とは違う答えが見えてくるかもしれない。これに関してはみんなで考えて欲しい。」

### 対話2 「中心と周縁」

**学生(柴田)**「内藤先生は時代の周縁・異端的な存在として建築に向かってこられた部分があると思う。それは先ほどの紀尾井清堂で、機能があふれる現代の建築に、あえて建築自体が持つパワーがあるのではないかと仮定して取り組まれたことにもつながっているのではと思う。これから建築を作る上で、時代に対して異端的な立場から、次に考えるべき視点、観点があればお聞きしたい。」

**内藤先生**「東京は再開発ラッシュだ。都の審議委員としてその審議をする立場にあるが、超高層は個人的には嫌いだ。なぜそんなにまでして開発したがるのか理解できない。その裏には資本主義のものすごいパワーがある。資本主義はいきなりは覆えらないが、今の開発のゲームが破綻する時にあなたたちが生きている間に必ず来ると思っている。社会が陥没したときにただびっくりするだけではつまらない。その次の時代をどうするか考えておくべきだろう。私たちが想像する以上に資本主義の力は強く、コロナ程度ではまだまだへこたれない。横丁の飲み屋はつぶれたが、ディベロッパ

### 1.はじめに

内藤先生をお迎えした今回の神戸建築学では、最新作である「紀尾井清堂」についての紹介を皮切りに、学生らがピックアップした3つのテーマと現代の学生が抱える悩みについて対話形式で議論を行った。本稿ではその主な内容を抜粋させていただく。

### 2.講義概要

#### 紀尾井清堂

立派な社会を築いてきたと胸を張って言えない後ろめたさを抱えており、自分を正当化するような作品説明は、特に3.11以降、心がざわざわして言いにくかった。しかし、そろそろ言ってもよいかとも思っていたので今回、約10年ぶりに自分の作品について説明する。この建物の施主とは20年来の付き合いでの、「機能は後で考えるから、思うように作ってくれ」という依頼だった。何を頼りに設計するか考え、『現代は「機能」や「経済」を建築の力の源泉だと思い込んでいるかもしれないが、「建築」それ自体が持つ力あるとしたら?』という問題設定をして作った。だが、不思議と取り組んでいる最中は現代建築に対する批評的な気分などではなく、ただ1つ1つのディティールを詰めることに執着した。ブルータルなコンクリートの15mキューブを抽象的なガラスで覆って対比させ、それを力を象徴する4本の柱で支え浮かしている。居心地の良さとはほど遠い容赦のない空間となったピロティは、キューブを支える物質感のある大地を表現するために焼き物の釜で使われていた耐火煉瓦を敷き詰めている。

建築にとって光は導き手のようなところがあり、内部空間にトップライトを入れようと思っていた。キューブ内のフロアからトップライトのサッシが見えないようにしている。このことで空間がシームレスに空とつながり、空を直

一はつぶれなかつた。しかし、そのうちどこかで必ず崩壊する。80年代のバブル経済崩壊のようなことは必ず起きる。

今のまがまがしい再開発は大嫌いで、その結果現れるデザインも嫌いだ。紀尾井清堂で提示した価値の反対側には、首都圏の巨大開発がある。巨大開発では絶対に作れない価値を提示したかった。不思議なことを考えたと自分でも思うが、紀尾井清堂では今の再開発がまとっていないもの、彼らからするとブラックホールのような価値を作りたかった。」

### 対話3「流行と不易」

**学生(旭)**「新国立競技場がきっかけとなり、建築というジャンルが社会の中で批判される立場になっているという印象を持っている。このような立場にある状況から次の未来を考える時に、こういうことをすべきだと考えていることなど、学生のこれから取り組み方があれば教えていただきたい。」

**内藤先生**「新国立競技場に関して建築の価値が社会的に棄損されたのは確かだ。隈さんの案は、絶妙で、批判されないことを予見的にデザインしているので、良くも悪くもなく誰にも非難されないとろに収めている。それは大した腕だと思うが、俯瞰的に見れば建築の価値が大きく棄損されたのは間違いないことだと思う。白紙撤回されたことも含めて、僕はそれを防げなかった。あなた方の世代は、何とかして、時間がかかるつてもいいので、建築的な価値を救い出してほしい。建築の価値は、地球環境と同じように弱っているので、何とか救い出す手立てを考える必要があるのではないか。それが若者の担うべきことだと思う。そうすると、救い出すものが何なのかを深く考える必要がでてくる。それは、部分的なものか全面的なもののかわからないが、誰にでも心の中にあるような、誰とでもシンクロできるような建築的な力を蘇生させることではないかと思う。」

大学の四年と大学院の二年は短い。本来、建築の教育はこんなに短くてはいけない。人間に対する深い認識をもってアーキテクトになるべきだ。ちょっとデザインがうまいとか下手だとか、そういうのは本当はどうでもいいことだ。忘れてはいけないことは、アーキテクトとは人間を扱う仕事であるということ。アーキテクトは建築を作らない。考えるだけ、図面を引くだけ。実際に作っているのは現場の人の手であることを忘れてはいけない。彼らとも人間的にシンクロすることができるような人間にならなければ、ほんとの意味での建築はできない。その術を若い人は身に着けるべきだと思う。それは、君自身がどのくらい素晴らしい人間になれるかということにかかっていることを覚えておいてほしい。」

### 対話4「失敗できない若者たち」

**学生(篠山)**「僕は失敗してはいけないということを考えてしまう。どうしたら道をそれる勇気を持てるのか、失敗してもいいメンタリティを持てるのか。」

**内藤先生**「みんな失敗しているよ(笑) 問題は、失敗する勇気があるかどうか。そしてなにより大事なのは、失敗を糧にするだけの力があるかどうか。ないつぶされるだけだからね。その力をどこから得るかだが、それはあなた自身が理想を持ち、志を持つことから得られるはずだ。そして、もった理想を実行できるほどの努力をしているかどうかを自分に問い合わせることだ。」

なんでも最高のモノを見ろ、と東大で教えていたときに学生に言っていた。音楽、絵画、芸術ならなんでもいい。2番目はいらない。地球上で一番素晴らしいと思う芸術があつたら見に行く。そうするとそこに至るにはどういう人生を歩んだらいいかが見えてくる。そういうものは手掛かりをくれ

る。何もなしで頑張ることは無理だと思う。これだというものに感受性の豊かな学生のうちに接するべきだし、その努力は必要だと思う。仮に素晴らしい絵画を見つけて心が震えたとして、その感覚を建築に戻すにはどうすればいいかという風に考えると、とてもなく大変なことになる。そうすると心配しなくともきっと失敗する。そのとてもなく大変なことを可能にするためには、さまざまな失敗や体験が必要で、その質を厚くしていくことだと思う。その積み重ねがどうしても必要だね。」

### 3.担当学生考察

我々は、事前学習で内藤先生の思想や建築作品を分析するにあたり、著書「建築の難問」を読み解き、「人間と自然」、「中心と周縁」「流行と不易」といったテーマを設定した。また「内藤廣と若者たち」という書籍を参考に、これまでの一方的な講義ではなく、学生側と講師側で活発なコミュニケーションをとれるインタラクティブな方法を採用した。

我々が日々悩んでいる建築との向き合い方や考え方、これから若者世代が担うべき責務、生き方そのものなど、次世代との対話を通じて、内藤先生が我々へ伝えたいことをダイレクトに感じることができた。

「人間は自然の一部と認識できる」「現代を支配する資本主義の崩壊に備える」「一番いい最高のモノを見ろ」という言葉や、本稿には記載できなかったが上記以外にも「優秀な人は人の歩いていない道を歩こう」「わからなさを楽しもう」といった内藤先生の思いを、我々は受け取ることができた。その中でも「アーキテクトになれるかは自身の人間性にかかっている」という内藤先生が思う理想の建築家像が、特に伝えたいことであるように感じた。

デザインが上手いということではなく、人に寄り添い、共感し、様々な体験を通して積み重なった人格や人間性を持たなければならない。これが内藤先生から次世代の若者たちへのメッセージだろう。

(文責:蒲田峻大、福原草雅)



内藤先生と参加した神戸大学の学生、教職員での集合写真

(最上段一番右が内藤先生)